

ホトトギス

昭和二十四年七月二十八日発刊
明治三十一年十月十一日第二種郵便物認可
平成十五年七月一日発行
第百六十七号

ホトトギス

七月号



平成十四年七月一日 ロイヤル俳壇

夏菊の色染め雨の上りたる
改修に夏炬欠かせぬことを先づ
山荘の夏炬親しむ心あり
夕立癖あるをたのみの庭となる

七月二日 後藤恒子様

まなうらに水無月の舞ひをさめられ

七月七日 下萌句会

水無月の見なれぬ鳥の来たる芝
雲の峰抜けたるよりの空の旅
見てをりし毛虫の所在失へり

七月九日 大阪倶楽部

扇の手止めて話に割り込みし
涼しげな熊竹蘭の葉の力
毛虫居ることに気づいてしまひけり
早暁の朝顔市に人氣あり

七月九日 綿業倶楽部

雷鳴を聞きてふたゝび睡りしか
はたたがみゴルフの記憶甦る
登山口すでに難所でありにけり

七月十一日 清交社

地図になき道は青田を抜ける道
今日のこと話す日傘を開ちながら
滴りのそこに源流ありにけり
滴りと木洩日と手に受けしより
見えて来てし白亜のホテル青田中
いかにして出水の街を来られしや
ともかくも日傘をさして行くことに

遠くから見て一面の青田かな
風渡り隣の青田つながりぬ

七月十二日 工業倶楽部

岳麓の夕風風荒し月見草
高原に咲く刻々の月見草
水無月や三瓶の旅の近づきし
夕立雲待てば素通りして行きぬ
石畳濡れて気づきし夕立かな
水無月や原稿依頼今日も来る

七月十三日 石見ホトトギス俳句大会前日句会

涼風を置き高原の雨去りぬ
露涼し山雨の去つてぬし三瓶
沼涼し山雨の置いてゆきしもの
合歓の花咲くをうながす山雨急

七月十四日 石見ホトトギス俳句大会

青嵐三瓶の景を呑み込みし
涼風と思ひある間につのり来し
健康を取り戻されし涼しさよ

七月十六日 有恒倶楽部

高原の朝のはじまる露涼し
美しき毛虫の未来考へず
地に下ろしたる二年目の百合咲きぬ
山の雷駆けぬゆきし旅路かな
草原の靡くものより露涼し
花束を受け百合の香に捉はるる

七月十六日 無名会

着きてすぐ雨に遇ひしも夏の山
滝音を呑み込込みはる潺かな
滝壺の遊びし帰路の合歓の花
高麗に遊びし帰路の合歓の花
涼しさを置いて来たりし帰路のこと

旅心失せつゝ汗の受話器とる
七月十七日 夏潮句会

子規のこと虚子のことただ涼しきよ
梅酒など子規の日記にありさうに
露涼し客問の声の往来また
もたらせし梅酒はやばや配らるる
記念館包みて茂るものばかり

七月二十日 野分会 夏行

滝音の木の間隠れでありしこと
汗引いて行く谷風を抜けてをり
ハンカチーフ時にはあふぎ山路ゆく
ともかくも滝の片鱗見るまでは
競はばや夏稽古会なる集ひ
汗などにかまつてをれず山路ゆく

第二句会

白南風に速度制限てふ旅路
汗のものの着替へたるより夕心
取り戻す涼しき旅の心かな
万緑に従ふ旅路ありにけり

七月二十一日 野分会 夏行

風道を見つけ扇を閉ぢにけり
曾遊の地今踏みしめて露涼し
石手川沿ひに涼しさを拾ひまし
何か居る動かぬ水面とは暑し

七月二十六日 時雨会

花修理中の庭荒れ破れ傘
遅れ来て西日をさまりあたりけり
夏風邪といふ表情でありにけり
先づ暑きことを言はねばならぬ日よ
七月二十八日 日本伝統俳句協会関西支部
万博のありし昔へ戻る汗

フィリピンの旅

稲畑汀子

海外への旅は久しぶりであった。海外といつても近い国フィリピンである。日本との時差は一時間という。言葉は英語が通じると言われても私の英語では心もとないが元フィリピンの田中大使が同行して下さるので心配ないということであった。それに甥の誠三もフィリピンはよく行っている。

英語に堪能な長山あやさんと東京の聖心の卒業生の河野美奇さんに同行をお願いしていた。

私が地球ボランティア協会の会長を引き受けて十年になる。毎年応募された俳句の選を引受け、年に一度の総会に出席して挨拶するだけの会長も、十年経ったので一度どのような援助をしているのか、今フィリピンでやろうとしている事業を視察してほしいと言われていた。また地球ボランティア協会が始まって最初に芦屋のわが家へ招き、協会からの贈呈式に来て下さったアキノ・フィリピン元大統領への返礼表敬訪問が果たされていなかった。熟慮して何とか一月最後の週の五日間をそれに当てることにすると決めたのはもう半年も前である。その日に向けて仕事のやり繰りをすればなんとかなるだろうという頭の中での計算が出来たが、その日はたちまちやっ

て来た。出発の朝までホトトギス雑詠選をしても間に合わず、個人的な選句も旅の荷に入れて発つことになった。まあ後は何とかなるという気持ちのままフィリピン旅立った。

寒い関空を発つて降り立ったマニラ空港は冷房がよく効いている夏であった。外は暑いと言ってもからつとしていて風が心地よい。関空に駐車して来た車にオーバーを脱ぎ捨て、軽装になって来たので涼風が懐かしい。

五日間宿泊するシャングリラ・ホテルは美しい近代的なホテルであった。ホテルの入口には机が置かれ警備員が居てロビーへ入る人の荷物をチェックする。長い割箸のような木の棒をバッグの中に突っ込むだけでオーケーが出る。警察犬を曳いて警備員が黙々と歩いている。

東京から合流して下さる田中大使の飛行機は少し遅れているとこの甥の誠三と迎えに来てくださった吉田さんがホテルのチェックインなどの手続きを済ませてくれた。その日は日本大使館公邸で夕食をおよばれることになっているがまだ時間が早い。

同じ六階の部屋にそれぞれがおさまると少し休憩することになった。やがてホテルに着かれた田中大使の案内で全ての品物が安いというデパートを見に連れて行って下さることになった。人が多く目が回りそうだ。日本のデパートに似ているが値段は断然安いのでびっくりする。

我々が一旦ホテルへ帰つて来ると広いロビーに赤い細長い絨緞を敷いているところであつた。

「あら、レッドカーペットを敷いてどなたかVIPのお帰りだわねえ」

敷きおわると大きな掃除機でカーペットの掃除が始まつた。

このホテルにブルネイの王様が泊つていることが分つた。

「あと三十分程でお帰りだそうですよ。アロヨ大統領との会見を終えて帰つて来られるのだから、或いは民族衣装をお召しになつているかも知れません。ここで待ちましょうか」

「ええ、そうしましょう」

やがて白バイやパトカーが先導した大きな車がホテルに横付けされた。少し背が低く、髭が印象深いブルネイの王様がダークスーツを着て背筋をしゃんと伸ばしてレッドカーペットの上をすたすた歩いてエレベータールームの方へ入つて行つた。

「民族衣装ではなかつたですねえ」

「本当に、でもやっぱり王様の威厳はありますねえ」

「彼は世界で一、二と言われる大金持ちなのですよ」

「へえー」

次々ドレスアップした女性やお付きの人々が消えると、どこからか現れたホテルのボーイが敷いてあつたレッドカーペットを端からくるくる巻いて担いで行つた。

さつきから王様のお帰りを待っているかにしゃんと立っていた犬のセパードがだらんと横に寝そべてしまつた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年七月三日 一水会

俳縁といふ涼しさに落ち着きぬ
百合の香を置きアンコール弾き始む
ひつそりと茅の輪くぐりし末社かな

七月四日 蕉心会

五月暗おしるし程に隅田川
対岸は暑き独立記念日に
汗引いて来て句心となりゆけり
視線とは関りもなく蟻の道
汗飛ばし思考飛ばしてをりにけり

七月十一日 土筆会

夜濯や一人暮しの頃をふと
触觉の靡き髪切虫消ゆる
先生の屋根は赤色バンガロー
七月十六日 草木瓜会

泥鰯鍋活きが良いとは言はれても
駒形は己が鬼門や泥鰯鍋
丸ビルを従へ虹の立ちにけり

虹立ちて嵐引き離してゆきぬ
台風を抜けて稲城に待つ句友
七月十八日 登高会

星割れて天道虫の離陸せり
絵団扇に藤原紀香微笑めり
東京の空赤々と夏の月
上着脱ぎネクタイ緩めすは団扇
絹団扇風を雅にしてをりぬ
半球を崩し天道虫飛翔

七月二十三日 若水会

香水と擦れ違ふより夜の銀座
滴りや大河の一部分として
めはじきを手折れば少女めく瞳
男坂来て滴りに落ち着ける
香水に本性あらはさぬ女

七月二十四日 三番町句会

暑氣中りせし子の寢息確かめて
炎帝に押されて河童忌の句座へ
七月二十六日 時雨会

心太箸に躍つてをりにけり
花咲いて模様としたる破れ傘

雑詠 汀子選

客人に埋火小さき積翠忌 石川 辻口静夫
 乾坤に霜の綺羅置く積翠忌 同
 臘梅の香に終焉の庵あり 同
 ひとひらの梅こぼれたるその朝 東京 今井千鶴子
 鳴雪忌あたかも喜美子忌となれる 同
 下萌や叱りくれたる人は亡し 同
 喜美子師を悼み病床冴返る 白石 鈴木とみ子
 春寒し臥す身にありしこと悲し 同
 もうお会ひ出来ぬは淋し月冴ゆる 同
 大琵琶の力となりて芦の角 東京 粟津松彩子
 東風波の寄せくる堅田古町に 同
 蛤は情のあるもの雛料理 同
 鶯や中辺路に又句碑生るる 群馬 稲畑廣太郎
 梅林を統べる一樹でありにけり 同
 鳴雪忌一人追慕の人加へ 同
 未来ある君立春を待たずして 京都 大野紅花
 君が死をうべなふ心日脚伸ぶ 同
 天駆けり陽炎がごとなりたまひ 同

冬ぬくし電話もなくて日曜日 福岡 松尾緑富
 書屋より庭に出て見る冬ぬくし 同
 旅先のお降ありしそれも嘉し 同
 朴の木に皆掃き寄せし朴落葉 大牟田 猿渡青雨
 朴の木に堆肥十俵冬構 同
 御配流と伝ふ帝の山眠る 同
 我が生の予告と聞きし春の雷 樺原 稲岡 長
 紀州南端春嵐夜の汽車 同
 霾や黄土の愁ひはるかにす 同
 杣径の消えかたかごの万の花 東京 河野美奇
 片栗の花の終りは知らざりし 同
 春眠の身を御仏に委ねられ 同
 悲しみは癒すすべなく春寒し 新潟 安原 葉
 日本派の流れに我も鳴雪忌 同
 参道の大樹を仰ぎ実朝忌 同
 花合歡の景の途切れず奥石見 姫路 桑田青虎
 なよなよとしたる黄菅も句碑の伽 同
 三瓶野の句碑の伽とも星月夜 同
 虚子やがて長閑に語り出しさうな 大阪 薦 三郎
 戦争にならんとしつゝ梅白し 同
 来ては過ぎゆくものバレンタインデー 同
 白梅に紅梅目立ちはじめたる 熱海 嶋田 一步
 白梅の白といふ色競はざる 同
 紅梅の紅といふ色競ひけり 同

雑詠句評(六月号より)

長びける風邪よと思ひ見る暦 熱海 嶋田摩耶子

風邪とは言え、今年は高熱が続き、癒えかかつては又ぶり返すという、しつこいのが特長であった。症状の重い時は日の経つのもわからなかつたが、やや小康を保つ頃、一体幾日寝込んだのであろうか、と暦を見る作者、一番気に掛かるのは日程であらう。

多忙に過しておられる作者の暦には、びつしりとメモが書き込まれている。風邪の癒え具合と日程との兼ね合いを考え、差支えあれば遣り繰りしなければならぬ。風邪に臥しながらも責任を感じておられる作者なのである。然りげ無い措辞ながら、長びく風邪への倦怠感や苛立ちなど、心の推移が言外に滲む味わい深い句と思う。(昭代)

暦を見て驚いた。こんなに長く風邪を引いて養生していたのだと知った作者である。風邪でぐずぐずしている間には暦どみなかつたのであろう。そう気がついたことでそろそろ元氣を出して風邪を追い払わなければならないと思う作者の心情の推移が読み取れる。(汀子)

梅一枝活けて仏となられぬる 東京 坊城としあつ

喜美子奥様の追悼句だろうか。そう解すると、いつも凛としておられ、時にきびしく、又、ざつくばらんに接して下さったお人柄には、梅の花に通じるものが感じられる。さらりと詠まれているだけに、かえって情が深い。(純也)

親しい人の亡骸の側には梅が一枝活けられてある。それは生前の為人にまことに相応しい梅の花。生前の思い出を辿りながら梅の花のように寒さに耐えながら花準備をして凛と咲く姿を重ねている作者である。感情用語が使われていないことで、心情がかえって深くなった。(汀子)

若水集

涅槃・引鴨

廣太郎選

引鴨の野に俳人として佇てり	留萌	三好雷風
引鴨の日本の暮しとの別れ	同	
鴨帰るシベリヤわれに遠い国	同	
涅槃図の円弧三千世界かな	大牟田	猿渡青雨
涅槃図にまたとなき良き日和かな	同	
何も纏はず重さうに帰る鴨	同	
鴨引いて海との境川になし	八代	山下接穂
残る鴨鳴いて生るゝ音符あり	同	
寺町の小字は残り涅槃の日	同	
夫在せる世を近づけて常楽会	神戸	山田弘子
涅槃図に紛れ込んだる絵解僧	同	
涅槃図に息の触るるを畏れけり	同	
鴨引いてしまひし水に杭斜め	松戸	高瀬竟二
鴨引いて沼にいち日波の綺羅	同	
大涅槃図に百畳の広からず	同	
限りある命でありし涅槃の日	高槻	谷本房子
引鴨に世界の空は一つなり	同	
思ひきり日本に憩ひ帰る鴨	同	

涅槃図の風に嘆きに耳澄ます	滋賀	大久保樹
涅槃会や青き瞳の祈りあり	同	
涅槃図をしまふ尼僧の背に夕日	同	
雲覆ふ空に鴨引く時間あり	静岡	須藤常央
行く鴨を日は焦がさんとしつつあり	同	
引鴨として大空を飾りたる	同	
帰心矢のごとき高さを鴨帰る	和歌山	武内緑水
点となりても連なりて鴨帰る	同	
引く鴨をまたたきもせず見送れる	同	
見渡して何処かには居る残る鴨	大阪	田崎令人
残る鴨時間たつぷり争へり	同	
おんあうら重ねて涅槃し給へる	同	
涅槃図にたどり着きたる暗さかな	東京	小川修平
涅槃図の暗さありがたかりしかな	同	
涅槃図の蟹が動きしかと思ふ	同	
アーナンダ何処に居るや涅槃像	高崎	吉村ひさ志
沙羅の樹の空七彩に涅槃像	同	
曼陀羅華濯ぎ涅槃の衆生まる	同	
涅槃絵図心怯える嘆きあり	石川	坂本玲子
想像を超えて鮮烈涅槃絵図	同	
鴨引きて観察小屋を淋しめし	同	
すがり伏す深き嘆きの涅槃絵図	同	
涅槃図の嘆きの声と思ふ雨	姫路	蔭山一舟
鴨帰る国あり不況なる日本	同	

若水集句評 廣太郎

引鴨の日本の暮しとの別れ 留萌 三好雷風

鴨は冬の間日本で生活し、春になると北の国へ帰って行く。果たして鴨自身が日本での生活をどれほどエンジョイしているのかは判らないが、「日本の暮し」という表現から、何か作者が鴨をまるで自分の家族のように思っているような愛情を見て取る事が出来る句である。

涅槃図の風に嘆きに耳澄ます 滋賀 大久保 樹

釈迦の入滅を描いた「涅槃図」は筆者も色々見た事があり、誠に感慨深い思ひ出がある。仏教の信仰の篤い人なら尚更感銘を受けるのであろう。風の音も、ひとつの天からの声と感じ取ったのかも知れない。作者のそんな信仰心から、實際心の中に聞こえてくる「嘆き」を深く感じているのだろう。

鴨引くや前方後円墳の空 羽島 日比すすむ

古墳の中でも「前方後円墳」は、大阪の仁徳天皇陵などに代表

されるように巨大なものがある。ただ見たそのままを表現しているような印象であるが、ダイナミックな古墳の姿を想像すると、季節との対比が、より一層空の広さ、そこを飛ぶ鴨の躍動感を感じさせてくれる。

涅槃絵図今年も妻と掛けにけり 福生 榎本令秋

毎年この時期になると掛けられる「涅槃絵図」、恐らく僧門にあらせられる作者ではないだろうか。奥様と、涅槃図を信者の為に力を合わせて掛ける。そのシンプルな表現から、却って信仰の深さが伝わってくる句である。

ペア徐々に増えて鴨引く日の近し 松山 遠山安津子

これから長い旅を始める鴨は、いろいろな準備段階のひとつとして、やはり自分の伴侶を見付けるのだろう。冬の間の営みとは違うちょっとした変化を見逃さず、季節の有り様を見事に感じ取っている作者なのである。

涅槃図の余白に入りて嘆きたし 半田 榊原百合子

釈迦入滅という、ひとつの悲劇的な場面である。絵の中では様々な動物が嘆き悲しんでいるが、その一員としての自分の姿をも感じ取っているのであろう。深く読み過ぎかも知れないが最近世の中が物騒で、そんな「嘆き」もあるのだろうか。